

と言ふべし、然れども一利一害は是れ世の常にして彼の改革も亦是に伴ふ損害なきにしもあらざるなり、改革は常に外形上教會の一致を破壊したり、而して未だ是に換べき善良なる一致を來すと能はず、各教會各々基督教的生活の一部を有するも未だ以て全部を盡くすを得ず、羅馬教會の長所は其秩序整然として粗ほ全會の一致をなすにあり、プロテスタント教會の長所は自由にして且つ進歩的なるにあり、羅馬教會は感情多く且つ儀式に富めり、換言せば基督教的生活に女性を多く得たるものと云ふべし、プロテスタント教會は眞理を尊び良心を重んじ智識の發達を圖るに長ずる所ありて、所謂基督教的生活に男性を多く得たるものなり、去れば彼是れ共に相補はざれば以て完全を爲す能はざるものにして、將來の基督教なるもの必ず此兩教會の長所を合し以て一と爲さざる可からず、

然れども此調和は吾人が基督教的生活に於て一層深く又一層高く進むに從ひ成就せらるべし、吾人は後ろに在るものを思はず前にあるものに向つて進むべし、吾人は基督教の儀文より其心靈に進まざるを得ず、而して其第一步は神學と宗教との區別を了得するにあり、蓋し此兩者の混同せる間は彼の頑迷なる宗派心は何時迄も教會を分離せしむべし、余にして若し聖書に所謂靈は眞理に因て救はると論じ、而して其眞理の形と眞理其者とを混同するに於ては、必ず眞理の形を以て世の救ひに必要なものと認むるに至るべし、果して然らば余は其形の周圍に靈あるを許さざるべし、余は將に言はんとす、眞理は唯一なり、若し余が主張する所眞理ならんか、汝の主張する所は必らず誤りなるべしと、去れば基督教徒の必ず了解し置べき事は眞理の儀文と眞理の精神とは全く別種の者たるとにして、換言せば神學と宗教との間には大な

る區別あるとを知らざるべからず、
 宗教とは何んぞ宗教とは尊敬と愛と従順とを以て不可觀的完全を望むにあり、而して其完全は固より吾人の中にあらず、寧ろ吾人の上にあり、彼の正直にして忠實なる家犬が愛情を以て其主に隨從するが如きは幾分か其間に於て宗教上の初歩を有するを看る、單に自己の腦力を發達せしむるとをのみ是れ努むるは是れ未だ以て宗教なりと云ふを得ず、宗教は吾人をして己れに優れる尊きものを尊敬するの念慮に於て知らず識らざるの中、自らを高むるあり、余もし余が崇拜する所の神の善なるを知らざる時は譬ひ其力余に勝れる所あるも、若し不義慘酷なるものと知らば是れ未だ以て宗教と爲すに足らずして、唯だ迷信たるのみ、斯くの如き信仰は余をして高尚ならしむる能はず、却つて余を墮落せしむべし、若し吾人の中に自己より尊きものあり、其潔白なると

高尚なると善良なると吾人の自己に勝れるとあるを發見せば、是れ即ち心中神の聲を聽くものなり、吾人は誘惑せられ又屢々惡を爲すことあり、然れども吾人の中には正義の聲ありて吾人の良心に語り、敢て吾人の惡に賛同するとなし、是れ即ち吾人より一層高等なるもの即ち永遠の正義にして神が吾人に向つて語る所のものなり、
 吾人は屢々賤陋卑劣なるとありと雖も、時に吾人心靈の中には此に勝れる理想あるを知る、譬ひ吾人は愚痴誤謬の間に彷徨ふとあるも、眞正なる善の肖像は吾人の内を離るゝとなし、吾人何ぞ之を尊敬せざらんと欲るも得ざるべからず、是れ即ち神の自からの吾人に現はすものにして、一度此無限の美妙、清潔、至誠の一般を窺ふに及んでは吾人已に宗教の智覺を得たる者と云ふを得べし、若し此完全なる善の妙義を常に望み之に則らんとを努むる時は、吾人は即ち宗教的人たるを得、此至

聖の善且つ美を見て此を拜するは是れ即ち宗教なり、而して之を言語に現はし、之を文章に編むは是れ即ち神學なり、余は屢々自然界に於て通有的存在を智識するとあり、而して其存在は自然の上にあリ、又自然の中にあリ、余は仰いて天を望み俯して地文を看、山川の美、風景の勝を眺め、或は茫々洋々なる大洋の其の際涯を見る能はざるが如きものを見るに當り、屢々萬有を總括し自然を網羅する唯一者あるを智覺す、茲に於て初めて神と相對するが如きの感を生ず、是れ即ち宗教なり、而して此感覺を分析し或は之を哲理に正すか如きは是れ即ち神學なり、

四福音書を繙きイエスの言語を讀むに當り、恰も日光に接するの感あり、光りと熱とは其教訓の中に和合して別つ可らず、光りは照し熱は温む、彼は善をして愛すべきものとなし、又之を得るは自然にして甚だ

簡易なるが如きものとなせり、彼は嚴格なる道德論者にあらず、又冷淡なる立法者にあらず、彼は人として人間社會に立てり、彼は宗教上の儀式に束縛せられず、彼は屢々安息日に於て他の日に於けるが如く弟子と共に散歩せり、彼は宗教的形式上の語を用ひず、其見聞する所のもの即ち「パン」或は水或は網或は魚等に依り其弟子に貴重の教訓を垂れたり、神或は天國をして遠きものに非らずと教へ、總ての人をして善を爲せ善の結果を得るに容易なるものとして教へたり、彼は我が師なり、又我が友なり、又我が兄弟なり、彼れの思想は常に我が思想の一部となる是れ即ち我が宗教なり、而して學者來りてイエスを解釋し、彼の幾分は人性にして其幾分は神性なりとし、或は彼れの教訓はアリストテールの哲學に類似せり、或は根據を置けりと云ふが如きは是れ即ち神學なり、

余は未だ曾て祈禱せしとなしと假定せよ、若くは余は唯、定規の祈禱文を暗誦したりと假定せよ、此時に當り神は余を去ると甚だ遠し、又神は高く天に止まれり、余は果して神が余の言を聽くや否やを知ると能はざるべし、若し神に語らんと欲せば多くの微妙なる言語を用ひて彼を譽め彼をたゞゆるを以て適當と思惟す、時に世の障害に遭ふて非常の變事を生じ、爲めに憂苦に陥り、失望落膽此を癒するの道なきに當り、初めて夢の醒めたるが如く神は己れに接近し己れの不快を聽いて己れを助け、其憂苦を取去るものたるを發見す、此に於て余の心は瞬間に變化すべし、茲に至つて余は初めて祈禱の何物たるを知るべし、例へ余は従前と異なるなく依然賤陋野卑の罪人たりとも、余は神と語るに恰も友と語るが如くす、若し心に憂惑を感ずるあれば直ちに往いて神の助けを求む、其神より得る所の「パン」に依り日々自からを養ふとを得、是れ

即ち宗教なり、然れども是等の實驗を集めて是が種類を區別し或は是に就いて哲理的判斷を下し或は之を綴りて文章となすが如き是れ即ち神學なり、
若し神に關して是等の經驗を得、彼は宇宙の主宰萬民の父たるとを覺り、彼は善惡邪正の差別なく雨を下し日を照して其子供等を慰め、彼は基督の教へし如く誠に我靈魂の友、彼は又我心に光と平和とを與ふるを發見するに於て、誰か此神を以て三位一體の神即ち神は三の「ペルソナ」にして其本體は一なりと云ふが如き思想を起すものあらん、斯の如き議論は余の性に或は適し或は適せざる事あらんも、是等は固より余の心に向つて一の益を與ふると能はざるべし、宗教は人の心に屬す、宗教は即ち愛なり、神學は人の腦に屬す、神學は即ち思辨なり、然れども愛は一にして變るとなし、獨り思辨に至つては其種類頗る多し、愛は一な

り慈母の愛兒に於ける愛と變るとなし、彼が女王たると乞食たるとを問はず其兒を愛するの情に於ては同一なり、或人余に告げて曰く、一日女王ヰ井クトリヤ陛下は或教會に於て神を崇拜しつゝありしが、其式終りて彼は女王陛下が、其夫と子兒を伴ふて出て來りしを見る、而して陛下はアルバート殿下に向つて、アルバートよ我等は是より歸らんか或は子兒を連れて遊びに行かぬかと言ひ給へり、斯の如きは必ずしも之を奇跡と爲すに足らず、然れども唯、女王と雖ども其慈母の旨意を以て子女に對するに至つては更に他人と異なる所なきを示せり、吾人が詩歌を讀んで大いに感情を惹起すは是の詩歌の言語の感情の言語たるが故なり、宗教は愛なるが故一にして常に變るとなし、神學は思辨なるが故思辨家の種類に依つて其趣を異にす、果して然らば古來基督信徒が宗教に依らず寧ろ神學に依りて教會の一致を圖らんとせしが如

きは是れ豈一奇觀にあらずや、斯くの如きは即ち木に縁つて魚を求むるの類到底其目的を達すると能はざるべし、宗教は何れの地に於ても同一にして變るとなし、宗教は尊敬信仰従順感恩希望及び親愛なり、羅馬カトリックの僧徒ハツクは自己の宗教と同様なる形式の西域國佛教徒の間に行はるゝを見又監督サウスゲイは自己の信仰と均しきものを或る回々教徒の間にて發見したり、余の知人中に「ユニテリアン」は基督信徒にあらずと信じたる者ありしが彼れ他日「ユニテリアン」なる友人が神の前に跪き居たるを見大いに感動を起し遂に自らも此を信するに至れり、宗教上の争ひより己れと異なる信仰を有するものを火刑に處したるとあるは宗教歴史に乏しからずして、其の被刑者が焔の間にあつて靜かに神に祈り懺慙として血を見る事父母の故郷に歸るが如き様を望み之を死刑に處したる

輩は大いに驚き失望の極我等は永遠の罪を犯せり我等は聖徒を殺したりと叫ばしめたるにあり、宗教は人心の中に働く神の靈に依つて惹起せられたる感情なれば、一にして常に變ずるとなし、獨り神學に至つては時代に依り教會により人に依り各々其趣きを異にする所なきを免かれざるなり、

然れども人或は問はん、萬世萬民を通して更に變ずるとなき真理あるとなきものありや、例せば彼の神は一にして萬民の父なりと言へる真理は萬古不變のものにあらずや、而して是れ即ち神學上の條文にして人の智性の爲めに設けられ信仰の箇條となれるものにあらずやと、余は是に答へて言はん、神は唯一なりとの文章は之を解するものに依り其意義を異にす、ユニテリヤン「唯一教徒」と、ツリニテリヤン「三一論者」とは此同一の文章を解するに於て全く別種の意義を附せり、ユニテリヤ

ンは單純に神は唯一なりと信じ、ツリニテリヤンは然らず、一にして三なりと云ふ、又神は父なりと言へる文句を以て譬ふれば、彼の親切にして柔和なる父親に依つて育てられたる小兒と、或は父なくして育ち、若くは父あるも慘忍酷薄なるものによりて育てられたる者に取つては甚だ其意義を異にするものにあらずや、彼の父慘酷にして母は善良なるもの、子は寧ろ神は母なりと云ふ方其心に感動を與ふると近からん、故に神學上の事は例へ如何なる單純なる文句と雖も、惣ての人に對し同一の意味を有するものにあらず、子供が其親に對するの愛は同一なり、無論其間に多少深淺の區別はあるも其感情の本領に至つては更に異なるとなし、彼の使徒パウロが惣ての智識は不完全なり、故に必ず終あり、而して信仰と希望と親愛とは永久盡るとなし、我等今知る所全つたからず、又豫言する所全つたからず、然れども全つたきもの來た

らん時全つたからざるもの廢たるべし、と言ひしは正しく余が從來主張し來たれる議論の意味を含有するものと言ふべし、又近世の哲學も惣ての智識は比較的にありとして是れ同一の何を教ゆ、智識は即ち物の本體より來る處の現象と之を見るもの、能力如何に依りて得らるべしと謂ふが如し、智識の輕重は常に變化して止まざるも、智識の本體は永久無變なり、智識はすたらん眞理は存すべし、

吾人が論じ來りし所は正當なる見解は果して有用なる者なりや否やと云ふにあらずして、大凡人として必ず正當なる見解なかる可らざるや否やと云ふにあり、換言せば人は其意見に於て大なる誤りを有するも其心に於て眞正の基督信徒たるを得るや否や、是れ即ち疑問の要點なり、古來種々なる學說を有する者の間に均しく善人の存するを見る、然かれは善は必ずしも學說の如何に依るべき者にあらずして、譬ひ如

何に些少なる宗派と雖ども、其間に多少の聖人若くは英雄若くは献身的事業を成就せし者を有せざるとなし、彼「クエツカ」派の初て「ニューイングランド」に來りたるや吾人「ピユリタン」の先祖は必ず此の「クエツカ」派の人々は基督信徒にあらざるべしと思ひしならん、彼等は惣て「カルヴァン」派の神學、即ち三位一體、贖罪及び人性の全廢説を拒絶し、且彼等は聖書を以て唯一の定規と爲さず、隨て之を以て基督教の信仰及び經驗の最高なる定規となさずして、彼等は寧ろ聖靈を以て聖書の上にあるものと言へり、斯の如く彼の「クエツカ」派の人々等は惣て「ニューイングランド」の神學の須要なる箇條に向て盡く反對したりき、例之へば人は神の感化を受くるにあらざれば自ら正しき事を考へ或は行ふと能はずと云ふが如き信仰箇條に對し全然反對の説を唱へて曰く、惣ての裡には内界的光あり、即ち凡そ世界の上にある者を悉く照すの光

なり、又惣ての人を救ふ神の恩恵あり、而して人若し其心に於て神の聲を聽く時は必らず天國に至るを得べしと、彼等は尙ほ一步を進めて洗禮と晚餐とを排斥せり、且つ基督教會に教師の不必要なるをも主張せり、斯くの如く彼等は惣て「チロンドックス」正統派の神學を排斥し、常に現在の教會及び其の信徒は悉く惡魔の業なりと言へり、又彼等は現今社會の形勢は全く誤れるものなりと信じ、誓を爲さず税を納めず、陪審官の義務を負はず兵役に服せず、又奴隸を使役せざりき、就中最も普通社會一般の感情を害ふたるは、彼等が異なる服を着け異なる言語を用ゐ、又異なる生活を爲したるにありき、吾人の「ビエーリタン」祖先が彼等を忌嫌し、其「ニューイングランド」諸洲に來るを拒まんとせしも亦宜なり、然れども遂に百計が盡き此を禦き遂くる事能はずして、此異端者を一時過酷の刑罰に處したりき、勿論斯くの如き出來事を今日より見

る時は甚だ怪むべしと雖ども、當時に於ては他に邪教の蔓延を防ぐの道なしと思惟したるが爲めなるべし、然れども今日に至り誰れか「クエツカー」派の基督教たるを疑ふ者あらん、誰か彼等は他の基督教信徒と同一に基督の名を戴くとを得ざるものなりと思惟する者あらんや、或る意味より言へば、惣ての正當なる教義は基督教の爲めに必要なり、即ち基督教をして思想の組織たらしむるに於いて必要なる事、是れ恰も惣ての機關四肢五臓は人身の組織に於て必要なるが如し、頭上の毛髮又指の爪の如きも皆人身の組織を完成するに必要なり、禿頭或は鬚者替者の如き固より完全なる身軀を備へたる者にあらずや、然れども近眼者或は片手を失したる者と雖ども尙ほ此世に生活するを得るにあらずや、神學に於ても亦然り、惣ての教説は其組織の完全を維持するに必要なりと雖ども、誰れか今日に於て「アダムの」現在の遺傳若くは

豫定説の如き説を以てキリスト教の爲め又一一般の宗教の爲め必要なりと云ふ者あらんや、然れども彼の「ルーテル派」と「カルヴストン派」は是等の學説の爲め互ひに相争ふて譲らざりき、論理上より考へる時は神學の組織の上に於て一の教義だも不必要なるとなし、如何なる瑣細の教義と雖ども其全軀を保持するには必要なり、去れば其中一二を擇んで是れくの教義は必要なり之を存するものは眞正の基督教なりと云ふが如きは寧ろ愚なりと言はざるを得ず、木をして善ならしめよ、去れば惣ての果實は善ならん、木をして惡ならしめよ、去れば惣ての實は惡ならん、蓋し木は其實に依つて知らるればなり、

木は實に依つて知らるゝとは是れ即ち基督教の根本的格言なり、然れども頑固心若くは宗派心は之れを甘諾すること能はず、之を了得すること能はず、彼等は實に因つて木を量らず、反て木に依つて實を量らん

と欲す、千八百六十九年ポルトランドに於て基督教青年會の集會ありしが、其會則中に、惣て福音的基督教徒は會員たるを得るとの箇條ありき、或人問ふて曰く、誰か福音的基督教徒なるや、人あり答へて曰く、凡そ眞實に主イエスを愛するもの則ち是なり、時に一人のもの立つて曰く、我町に主イエスを愛すると他の基督教徒に異ならざる、エニテリヤンあり、彼等果して福音的なりや如何にと、學者なる宣教師答へて曰く、エニテリヤンは眞實イエスを愛すると能はず、是れ彼等に取りつて出來得べからざるとなりと、斯くて彼は木に縁つて實を量れり、此の木は「エニテリヤン」の木なり、故に其木には必ず善き實を結ぶと能はざるべしと、實は善なるが如し、其香も亦善なり、其味も善なり、其様眞にイエスを愛するものゝ如し、正直、従順、信仰あるものゝ如し、然れども其來たるや、エニテリヤンの木よりす、故に之を捨よ、是れ必ず惡ならんと、然れども若

し善を學ぶに於て眞の善なるを見て學ぶにあらざんば吾人の信仰の美事は何處にあるや、若し吾人が基督信徒なるの前に於て善の何者たるを知るにあらざんば如何にして基督教は果して善なるや否やを證するを得ん、吾人は常に云ふ、基督教は人の徳義を高むるに適當する教なり、基督は清淨、至誠、善良なると空前絶後なりしと、然れども尙ほ基督教を學ばざるの先に於て善人になるものたるを了知せしにあらざんば、如何でか此言を吐くを得ん、

去れば基督教徒たるの公道を守らんと欲せば、須らく先づ神、クリスト及び基督教の智識を吾人に與ふる眞實上の宗教的實驗と是等に關する學說とを授くる神學上思辨等の區別を明かにせざる可らず、人若し基督教を以て學說なりと信ずる者あらば、其人は必ず自説を過重して他を容るゝ能はず、爲に己れと異なる説を主張する者あれば強て之を己

れに服従せしめんと欲す、斯る宗派中にありて自由主義を保持せる基督教徒は、専ら人類一般の爲め或は基督教全體の爲め常に義の戦を爲しつゝあり、彼等は基督の曾てペテロに訓へて曰へる、神及び基督の上に関する智識は決して血肉に依りて現はるゝ者に非ずして、天に在す我が父に依りて現はるべし、との教訓を以て満足せり、大凡そ血肉の上に、文字句調の上に、論理學の上に於て人の作爲せし教義の如きは、未だ以て絶對的必要なる智識なりと云ふを得ざるものにして、其誠無疑の宗教的智識は即ち人間の生命より自然に迸發し以て内心的確信となり、隨て人間は此の良心の力に依り以て正義を確信するに至る者なり、彼のパウロは基督の靈、エペソ人の頭に宿らんとを祈らずして唯だ其心に宿らんとを祈りたり、

宗教は神學の根本なり、神學は宗教の根本にあらず、生命は人間の光な

り、人間は生命の光にあらず、徒らに神と基督に關するの教理を以て未だ其生活に於て神と基督を見ざる者の腦中に滿す時は、却つて其神靈的の働きの發達を妨げ或は之を撲殺するとあり、去れば青年者に向つて基督に關する思辨的教理を授けんよりは寧ろ彼等を引いて基督に至らしむべし、彼等をして基督の言葉を讀み其生活を學ばせ其生涯を學び以て之を己れの身に適用せしめよ、吾人は思辨に依りて神を知ると能はず、吾人は實際に於て神を愛し神に従ひ神に依て生活し神の子供等を實際に愛し助くるにより初て彼を知ると云ふを得べし、

此宗教と神學との區別は完全なる智識上の自由の爲めにも亦必要なり、若し學説を以て必ず救ひに必用なる者と信ずる時は、吾人は之を自由自在に研究すると能はざるべし、未だ其終極に至らざる前吾人は或は恐れ或は望の爲に其思想を枉ぐる事あるべし、人若し其思辨に於て

無神論者たるも、其心に於て眞實ならば之を稱して眞誠の「クリスチヤン」と云ふを得べし、例へ其神學に於ては大いに誤るあるも其信仰に於て影響する所なからん、記憶せよ基督信徒に必要なものは愛なり、信仰に根ざし望みに依つて強くせられたる愛なり、然る時は吾人は安んじて惣ての眞理を研究するとを得べし、

獨り此主義は教會の一致を來たすのみならず、此の全社會を神と基督とに誘導する事を得、イエスは其終りの祈りに於て、若し其弟子等互に一致すると能はずば此の社會を彼に服せしむると能はずと教へ、且つ祈りて曰く、此は皆一にならん爲なり、父よ汝我にあり、我亦汝にあり、如く、彼等も我等に於て一になり、而して此の世をして汝の我を使はせしとを信ぜしめよと、基督信徒にして唯、自己と意見を同ふせる者のみを一致せしめ其の異説者を排撃するに於ては到底教會の一致を望む

事能はざるべし、然れども若し彼等にして惣て眞實に神及び基督を知り且つ正義を學ばんと欲するものと協力一致することを望まば、或は遂に學説に於ても相合するの日なきにしもあらざるべし、然れども唯一眞正なる一致即ち基督教に必要な一致は平和の鎖りの中に於ける靈の一致なり、

第二章 基督教國の信仰箇條

(417) 梯階之仰信

此章の目的は基督教會に於て必要なる信仰箇條の中其一致せる者を示すにあり、余は眞正なる「カトリック」教會の信仰たるべき基督教國の信仰箇條を示し、且つ基督教信徒互に相分れ相争ふ信仰箇條よりも、彼等の互に相合せる者如何に多く如何に重要なるかを示さんと欲す、初めて基督教會を見る者は其各種の信仰箇條及び宗派の争鬭所たるを認むべし、宗派の争ひは使徒の時代に於て既に「コリント」の教會に於て端を發し、或る者は「パウロ」に屬し或る者は「アポロ」に屬し或る者は「ペテロ」に屬し又或る者は基督に屬すと云へり、其後二三世紀に於て基督教徒は互に教理の異同により相犯し相攻め相殺したるとあり、第十世紀に於て彼の聖靈は聖父より得たるか或は聖父及び聖子より得たる

かどの議論に依り基督教會は遂に東西二派に分裂せり、其後異端者に對しての十字軍起り、過酷なる改宗命令の壓制行はれ、宗教上の戦争は以て殆んど歐羅巴の半をして原野と爲すに至れり、是等は吾人に取つて恰も恐るべき夢の如く、思はれ、今日吾人の争闘は唯た言葉の上に存すれども是れ亦既に其跡を絶ちつゝあるなり、昔時信仰を誤る者は悪人の如く思惟したれども、今や然らず、或は却つて之を榮譽とするものあり、若し先祖傳來の舊説を説く者あれば人之を聽くを欲せざれども偶、新説を唱ふる新宗教の發見者たりと評せらるゝ者あれば人初めて其説を聽かんと欲す、群衆は直ちに彼の周圍に集まるべし、宗派争ひの熱は稍醒たるが如きも、尙ほ宗派の別は現然として其間に存す、吾人は教義の異同に依り互ひに相争ひ盡せるが如きも未だ曾つて一致すると能はず蓋し吾人は信仰上の重要なる箇條に於て已てに

一致し居るものなるを發覺するの時に於て必らず一致するの秋來らん、現今は互に相容るゝも亦相隔つゝあるものなり、人若し信仰箇條の百中其異なるもの一にして、合するもの九十九なるを知り、又其合せる所は須要なる箇條にして異なる所は不必要なる者たるを覺り、又惣て信徒の實際的信仰は同一にして異なることなきを覺ゆるに至らば、初めて共にくゝに働き相愛し、喜ぶに至るべし、是れ余が此章に於て基督教徒は如何に多くの點に於て業に既に一致しあるものなるやを示さんと欲する所以なり、

基督教國の信仰箇條に於ける第一條は即ち

我等は天地の造り主全能全智なる神を信す、

古來基督教徒は神の性質譬ば三位一體の奧義等に就て大に争論あり、或人曰く、神には三個の「ペルソナ」即ち人稱あり、或は三個の實在の形狀

あり、或は曰く是れなしと、然れども此事たる茫漠として又至難なり、恐くは誰も此理を明了に解し又之を明了に言ひ現はすと能はざるべし、又之を證明するに就き聖書の語を引用すると能はざるべし、故に實際の問題は如何にして吾人は之を信するやと云ふに非ずして、如何に之を言ひ現はすかと云ふに過ぎざるべし、而して惣ての基督信徒は實際に於ては神は一なるを信ず、吾人は昔時のキリシヤ及異邦人の如く數多の神の存在を信する者に非ず、吾人の崇拜する神は惣ての者の上にあり惣ての者に通じ又吾人物ての者の中にある唯一の實在者なり、惣ての基督信徒は無神論者に反し能く神あるを信ず、惣ての多神教徒に反し神は唯一なるを信ず、唯物論に反し神は靈なるを信ず、凡神論に反し神は、ヘルソナ即ち人稱あるを信ず、迷信に反し神は無限の善にして罪惡の神にあらず愛の神なるを信ず、惣ての迷信者に反

し神を崇拜する者は必らず理性と道德に依るべきを信ず、無論種々なる異論は基督教徒の中に入り來り、即ち凡神論、多神教、唯物論、迷信保存等は基督教の中に混入し來れり、然れども是等は未だ曾つて基督教國の信仰箇條として賞美せらるゝ事なく、却つて常に異説異分子として退けられたり、通有的教會の教義なる者は即ち左の如し、

神は一にして天地の造り主全能の父なり、彼は靈なり彼は一なり彼は、ヘルソナなり彼は愛なり、而して愛に宿る、彼は人に向て勇氣と自由と道理に基く崇拜とを要求す、

基督教國の信仰箇條の第二の要點に曰く、

吾人は神の子なるイエス基督を信ず、

基督教徒は基督の性質及び其位置に關して相争へり、彼は神なりしや將た人なりしや、彼は大なる天使にして人の上にありて神の下にある

ものなりしやと、然れども彼を神と稱する者は其神たる所以を説明するに當り無限の靈と基督の人性的靈魂とを相合せり、又彼を人と稱するものは彼は其思想、心性及び意思に於て神と親密に相合したるものなりとす、如何に極端の說を唱ふるものも基督を以て普通の人と爲さず彼は非凡の偉人なりと云ふ、然れども苟も基督教信徒の名を戴くものは誰かイエスの潔白、眞實、謙遜、勇氣、親愛を疑ふものあらん、誰か彼の教へし眞理は各國を癒しつゝあるを非認せるものあらん、誰か彼に依つて發起せられたる運動は人類の歴史中最も大なる事實たるを認め得ざるものあらん、去れば惣ての信徒惣ての、クリスチャンは茲に於て合せり、彼は神と人とに對するの愛を以て最上至高の立法なりと教たり、彼は何人も此上に進むと能はずと言へり、吾人が惣ての基督信徒と共にイエスは基督なる神の子なりと云ふに

當り其意味する所如何、吾人は彼が善を以て惡を制するの教は能く世界の罪と惡とを亡ぼすに適したるを知る、吾人は彼の眞理は遂に勝を制し彼の愛は遂に惣ての心を得、而して惣ての人の膝は彼の至誠に向つて屈むとあらんとを知る、是れ即ち彼が基督にして世界の王たる所以なり、彼れ他の者に優りて高尚なる神靈的の法律を我等に授けたるに依り我等之を主と仰ぎ、又我等をして惡と罪より救はれしむるは獨り彼れが教へし神の愛と其限りなき恩恵に依るの外なきにより我等彼を稱して救主と云ふ、然れども彼も亦他の人と異なるとなく我等の兄弟たるなり、基督教國の信仰箇條中、其第三點とせるものは即ち聖書なり、惣ての基督教徒は聖書を以て世界の書籍中に在て最も神聖なるものなりと信ず、其「インスピレーション」に關して人各々說を異にし、或人は云ふ聖靈

は恰も俗人の樂器に於けるが如く聖書の記者を用ゐて其眞理を現はしたりと、或者は論ず聖書の中にある物ての言葉は其一點一畫に至るまで悉く絶對的の眞理なりと、然れども他の者は聖書の記者も亦他の人の如く普通一般の「インスピレーション」を受けたるものにして、唯其程度に於て異なる所ありと雖ども、其「インスピレーション」なるものは必ずしも無謬にあらざるべしと、而して物ての基督教徒は皆聖書中に神と誠の充てる書たるを知る、然り、聖書は吾人を慰さめ吾人を強め吾人をして義務を知らしめ吾人を引いて神に至らしめ吾人の靈を聖むるものなり、病者の爲め其心を慰さむるもの、恐く聖書に若くものなかるべし、死者をして靜かに其運命を致さしむるもの、恐らく聖書に優るものなかるべし、聖書は實に有用なる書なるは物ての教會の信ずる所なり、

基督教國の信仰箇條に於ける第四の要點は即ち聖靈に關することなり、曰く、

余は聖靈を信ず、

基督教徒中聖靈を信ぜざるものあるか、無論彼は三位一體中の「ペルソナ」なりや否や、或は其感化力は不可抗なるや如何んに至りては甲乙各、其説を異にするものあり、或る者は思へらく、聖靈は時に來たり又時に去ると、他の者は思へらく、聖靈は吾人と共に常に止まる所の神にして心を開いて之を受くるものには眞理と愛とを送るものなりと、或る者は思へらく、彼は吾人の心中に未だ曾つてあらざりしものを注ぎ入るゝものなりと、他の者は思へらく、彼の感化力は恰も一の心靈の他の心靈に於けるが如きものなりと、余は友人と語りて憤り大に不快を感じ心中大ひに錯亂せり、然れども彼は靜肅にして強く正しく柔和に

して恵み深し、彼と語るの間に於て余の悪感情は悉く解去り余の悪しき企ては悉く失せり、然れども是れ彼の議論に依つて然るにあらず、彼は議論を用ひざりし、即ち彼の聖靈が余を感化したるものなり、余は是に抗すると能はざりき、斯くの如く吾人が神と交通するに當り神の聖靈は又吾人を感化す、

若し吾人にして其現在を感ぜざる時は如何ん、吾人の生活は是が爲め大なる不幸に陥らんのみ、是れ恰も窓の暖簾を閉ぢて太陽の光りを防ぐが如く、心を閉ぢて神の光りを防ぐ者なり、蓋し其心に於て悪と知りつゝ、尙ほ之を遂げんとを欲するが爲めなり、然れども一たび心の窓を開く時は天の光りは忽ち注入し來り、吾人の靈は神の聖靈に充さるゝに至らん、吾人は聖靈を信ず、即ち聖靈は吾人を引ひて新しき真理に至らしめ、基督教に進歩を與へ、教會と各個人の靈に經驗を與へ、又吾人と

共に吾人の中に宿るものたるを信ず、

基督教國の信仰箇條中其次に位するものは、教會に對するの信仰なり、基督信徒は何れが眞正なる教會なりやとの問題に就ひて大に争ひ闘へり、惣て基督信徒は聖徒に交はるを信す、即ち惣ての同一なる眞理を保持し、同一なる主に奉事し、同一なる天國を希望する者は兄弟なるを信ぜり、凡そ二人若くは三人の者基督の名に依つて相會する時は教會の本領既に茲にあり、二人若くは三人の者鞏固なる信仰を以て相會せば是れ即ち教會なり、彼等の信仰は彼等をして相集り相合せしむ、吾人は政治に於ける教會を有す、即ち「デモクラテシク」教會及び「レポブリカン」教會なり、吾人は改革に於ける教會を有す、非奴隸教會、禁酒教會なり、吾人は又社會に於ける教會を有す、貴族的教會、平民的教會、又或は保守的俱樂部あり、合衆俱樂部あり、女權俱樂部あり、惣ての觀念は協會を組

織す、然り最も大に最も深く最も高き觀念は最も大にして且つ永久なる教會を組織す、去れば教會も亦人世の必要に依つて起りしものなりと云ふべし。

世には教會に加はらざる一種の人々あり、安息日を讀書睡眠若くば運動に費せり、然れども余は彼等が大なる利益を失しつゝあるを信ず、彼等は自から幸福なる兄弟の仲間より離れ去りたるものなり、其他自ら教會を離れて思ひくゝに其喜びを取るものなり、

余の考ふる所に依れば、彼等は甚だ過てり、是が爲め其思想狹隘となり次第に人類の全躰に遠かるに至らん、斯くの如き理由あるに依り惣ての基督信徒は同人種の仲間として同一の教會に結ぶことを爲すものなり、

基督教國の信仰箇條中には惣て道德上の立法を含有せり、即ち彼等皆

義務權利、誠實、潔白、眞理、慈善、忍耐、攝生、謹直、神と人とに對するの愛に關し同一の觀念を有す、

未だ曾て正邪善惡に關する新思想に依り新たなる教派を建設したるものあるを聽かず、未だ曾つて聖書の金言を信ぜざるが爲め其人を不信者なりとて排斥したるものあるを聽かず、また曾つて山上の垂訓の意義に關し激しく神學上の論争ありしとを聽かず、未だ曾つて十戒を非認したるが爲め其人を教會より放逐したるものあるを聽かず、頑固なるものは常に他人よりも多くのとを信ずる者の中に存し、而して未だ他人より多くのとを爲す者の中に於て存せざるなり、基督教國の信仰箇條は神と人とに對するの愛を以て其本領と爲すものなり、

基督教國の信仰箇條中に永遠若くは永世に關するの箇條あり、然れども基督信徒の中誰か此信仰を排斥せるものあらん、彼の復活審判天國

若くは地獄の見解に就ひては多少異なる所なきを得ざるべし、或る者は曰く、吾人は現在の身軀と同一なる物質を以て造りたる身軀にて復活すべしと、他の者は吾人は靈軀を以て復活するならんと又或は基督の審判は一定の場所又一定の時に於て開かるべしと、他の者は思へらく基督の審判は常に實行しつゝあるものなり、唯だ將來に於ては一層明白なるのみと、或る者は天國と地獄は場所にして其間有形的の教會ありと論じ、他の者は天國と地獄は靈魂の狀態にして、一は神より受くる愛と平和と喜びの狀態、他は罪より出でたる苦しみの狀態なり、然れども惣てのもの皆齊しく永世不滅復活、天國及び地獄を信ぜり、又イエスの贖罪に關し、其信仰の趣きを異にするものあり、然れども凡ての基督教徒は皆イエスが或る意味に於て靈魂を神に連れ歸りたるを信ず、或る者は思へらく、基督の死は神の心を動かすに必要なりき、彼

は神の怒り若くは神の至誠若くは神の公義若くは神の道德上の政治を守らしめんが爲めに死せりと、彼は神の性に於ける二個の屬性を調和せん爲めに死せり、即ち神をして義にして且つ慈悲あるものたらしめんが爲めに死せり、神は惣ての人の罪を許さんとを好む、然れども彼れ之を爲す能はず、如何となれば彼の公義は彼をして或る者を罰せしむればなり、基督曰く、我を罰して以て彼等を許し玉へよ、神は之が爲めに其公義の原理を破る事なくして惣ての罪人を許したりと、他の者は思らく、基督は人をして神と和合せしめんが爲めに死せり、而して神をして人に和合せしめんが爲めにあらず、彼は吾人を神に誘はんが爲めに死せり、必ずしも神を吾人に誘はんが爲めにあらず、彼の死も亦彼の生涯と共に其感化力を人の心靈に及ぼせり、彼は吾人をして天の父の限りなき恩愛を知らしめんが爲めに來れり、又吾人をして神

は吾人が自からの爲めに心を用ゆるに勝りて吾人の爲めに心を用ゐ給ふものたるを知らしめんが爲めに來れり、彼は神と人とを一ならしめんが爲めに教會を一ならしめんが爲めに邦國人種階級を一ならしめんが爲めに戦争壓制奴隸賣買嫉妬猜疑其他惣て不義不正を取り去らんが爲めに死せり、若し二人の者相争ふに當り福音の爲に和睦せられ或は傲慢なるもの謙遜となり卑怯なるもの勇者となるを得ば是れ即ちイエスの死の結果なり、イエスの死は惣ての人を和合せしめんが爲めなり、即ち神の愛に基くものなり、惣ての基督教信者は皆救ひを信ず、然れども基督に依れる救ひに關する意義に至つては各々異なる所あり、或る者は思へらく救は人の靈をして未來の苦しみ未來の地獄より免れしむるにあり、イエス吾人の借財を拂へり、吾人は彼を信ずるに依つて救はれん、即ち未來に於ける救

ひなり、未來の罰より免るゝとなりと、他の者は思へらく現在及び未來に於ける罰は即ち惡行の自然の結果なり、罰は自然の理法中に存するものにして何人も之を避くると能はざるべし、又之を受くるは却つて吾人の爲めに益なり、罰の目的は其人を聖め且つ改めしむるにあり、罰は現在にあり亦將來にあり、之を避けんと欲するは無用なり、是れ必然なり、故に救は此罰を除く者にあらざ、救は寧ろ吾人をして罪より免れしむ、イエスは吾人に新しき心を與へ善事を愛するを教へ吾人をして新しき生活に歩ましめ神と天國に交はらしむるとに依つて吾人を救へり、彼は未來の救ひ主にあらざ、寧ろ現在の救主なり、彼の與ふる天國は其端緒を現世に開くものなり、總て何人にも眞理の爲めに身を致すものは是れ即ち天國に入りたるものなり、惣て神を信じ彼と交はると恰も朋友と交るが如き者は是れ天國に入りたる者なり、惣てイエ

スを愛し彼れの業を學び彼れに従ふ稚兒を助くる者は業に既に彼と共に天國に座せる者なり、イエスは吾人の信仰希望勇氣を與ふに依つて吾人を救へり、吾人をして人を愛すると神の彼等を愛するが如くならしむるとに依つて吾人を救へり、彼は外形の地獄より吾人を救はんよりは寧ろ吾人の内心の地獄、即ち惡き感情、制す可らざるの慾情、冷淡なる心、憎き嫉妬心、愚痴不實等より救へり、彼は眞理清潔善を愛するの心を與へて吾人を救へり、是れ即ち多くの基督信徒が基督の教に關するの見解なり、

斯くて我等惣ての者は皆父と子と聖靈の中に入りて洗禮を受たり、夫の不可思議にして殆んど解すべからざる三位一體の教義の如きは他日頗る深遠奧妙なる意味を有する者となるに至らん、吾人が「我等父を信ず」と言へる時に於て既に神の造りし者は皆眞正なり、即ち惣ての過

去は眞正なりとの意味を含有す、萬有、科學、歴史皆是れ眞正ならざるはなし、世の初めより以來神は惣てのものの中にあり、彼は惣ての宗教に默示を與へ、惣ての國に於て彼の子供の靈魂を養へり、彼は一箇人の私有にわらず、即ち通有的天父なり、

吾人が「我等子を信ず」と言へる時既に吾人は人世の惣ての形狀は基督の教會の一部として之を甘諾する意義を含有す、イエスは神の子として惣ての人類を其父に誘ひ、又キリストは惣ての靈魂を神に導くものなり、惣て人類は神の子なり、惣て彼等は神に依つて愛せらる、彼は惣てのものに救はれ且つ眞理を知るに至るとを望む、神は父として萬有に存し、且つ歴史に存するが如く、又子として眞理に存し、人類をして己れに合せしむ、如何なる卑賤の者と雖とも此救の愛に漏るゝものなし、神は造物主又天父として過去にありしが如く、キリストは子として現在

の生活の中にありて吾人と共に此處にあり、故に今は恵みの時なり、今は救の時なり、

吾人が我等聖靈を信ずと云ふ時は將來に於ける大なる希望を含有す物てのものは遂に全きに達し、悪は善の爲に亡され、進歩は宇宙の定法にして永遠決して終るとなし、

イエスが其弟子に向つて聖靈の來らんとするを語りし、其語に曰く我尙ほ汝等に向ひ多くの語るべきとあり、然れども汝等今之を聽く能はず、去れど彼の眞理の靈來たらん時、彼れ汝等を引ひて物ての眞理に至らしむべしと、

故に聖靈は神の天啓を全ふせんが爲めに來れり、彼れは四福音書の中にある天啓を成就するものなり、彼は吾人をして新約の儀文を離れ其精神を明かにす、彼は基督教を以て不變の信仰箇條と爲さす、寧ろ進歩

的宗教と爲すものなり、彼は物て神が其子供に教へ給ひし諸々の道に於て、或は學術、異邦の宗教、異邦の哲學等に存する有益なる結果を採用するとを教へ、彼は基督教を以て世々進歩して止まざるの宗教たらしめんとす、

余は此死せるが如き三位一體の教義を以て無益に信ぜざしむるを好まず、必ず其中には從來世人が附與したる意味よりも尙ほ深遠なるものあるを信ず、余に取つては三位一體は即ち通有的合一を意味するものなり、基督教は吾人に教ゆるに神は物てものゝ中、即ち萬有、生活、歴史、人類、現在及び將來にあることを教ゆ、斯くの如く解し來れば父と子と聖靈の教義は物ての狹隘を排斥す、狹隘なる學術は基督教を排斥し、又狹隘なる基督教は學術を排斥せんとす、然れども余が上來述べ來りし所は即ち此兩者の狹隘を排撃し、又余が保守的の眼孔ある宗派の狹隘

を排撃し、又彼の物て改革を嫌忌する保守的の狹隘を排撃す、又彼の過去の大なる歴史を顧ざる過激なる改革者の狹隘を排撃す、吾人は父なる神を子により聖靈に於て崇拜す、神は一にして物ての者の父なり、彼は物ての者の上にあり物ての者に通ず、又物ての者の中にあり、一の主イエス基督は道なり眞理なり命なり、彼は吾人が天に昇るの門戸なり、彼は吾人の生命を養ふ、パンなり彼は世の始より殺されざる羔なり、彼は神か人間に宿り物ての子供等を救はんと欲せるものなることを示せり、

一の聖靈即ち至聖の靈は吾人の因つて以て歩み以て語り以て生ける所の者なり、彼は吾人が昨日知りしよりも猶ほ善きとを教ゆ、彼は基督教の信仰を基督教的の經驗に變ず、彼は吾人をして單に基督教を語り若くば之を考ふるのみにあらず進んで基督教を行はしむ、物ての善

其信者の心中に宿り一の聖靈は物ての善を彼等に與ふべし、

斯くて同一の神は吾人の上にあり、又吾人と共にあり、而して又吾人の中にあるものなり、神は總べての現象默示生活に象はる、神は過去現在未來に於ても一なり、吾人は是等の理を了解し初めて物ての聖徒の眞正なる交はりを知り、又是に依り初めて教會の一致を知る、斯くて基督教國は其須要の大躰に於て既に一致せるものたるを見る、吾人は物ての基督教徒は其教義に於て異なる所あるも皆同一なるを知る、唯、彼等が異なる所以は彼等の狹隘なるが爲めなり、彼等もし一層深く進み一層高く登らんか必らず一致和合すべし、蓋し彼等は皆一の神一の基督一の聖書一の立法一の通有的教會一の永遠不朽の生命一の聖靈を信ずるものなればなり、唯、其の異なる所以は今彼等の知る所全つたからず、其見る所も亦全つたからざるが爲めなり、故に其愛の廣大なるを以

て其の信仰個條の狹隘なるを補はば必らず一致和合するの時あるな
り。

信仰之階梯 大尾

明治二十七年五月十日印刷
明治二十七年五月十四日發行

定價金 壹圓

翻譯者

金 森 通 倫

發行者

神 田 佐 一 郎

印刷者

高 田 乙 三

發行所

日本ゆにてりあん弘道會

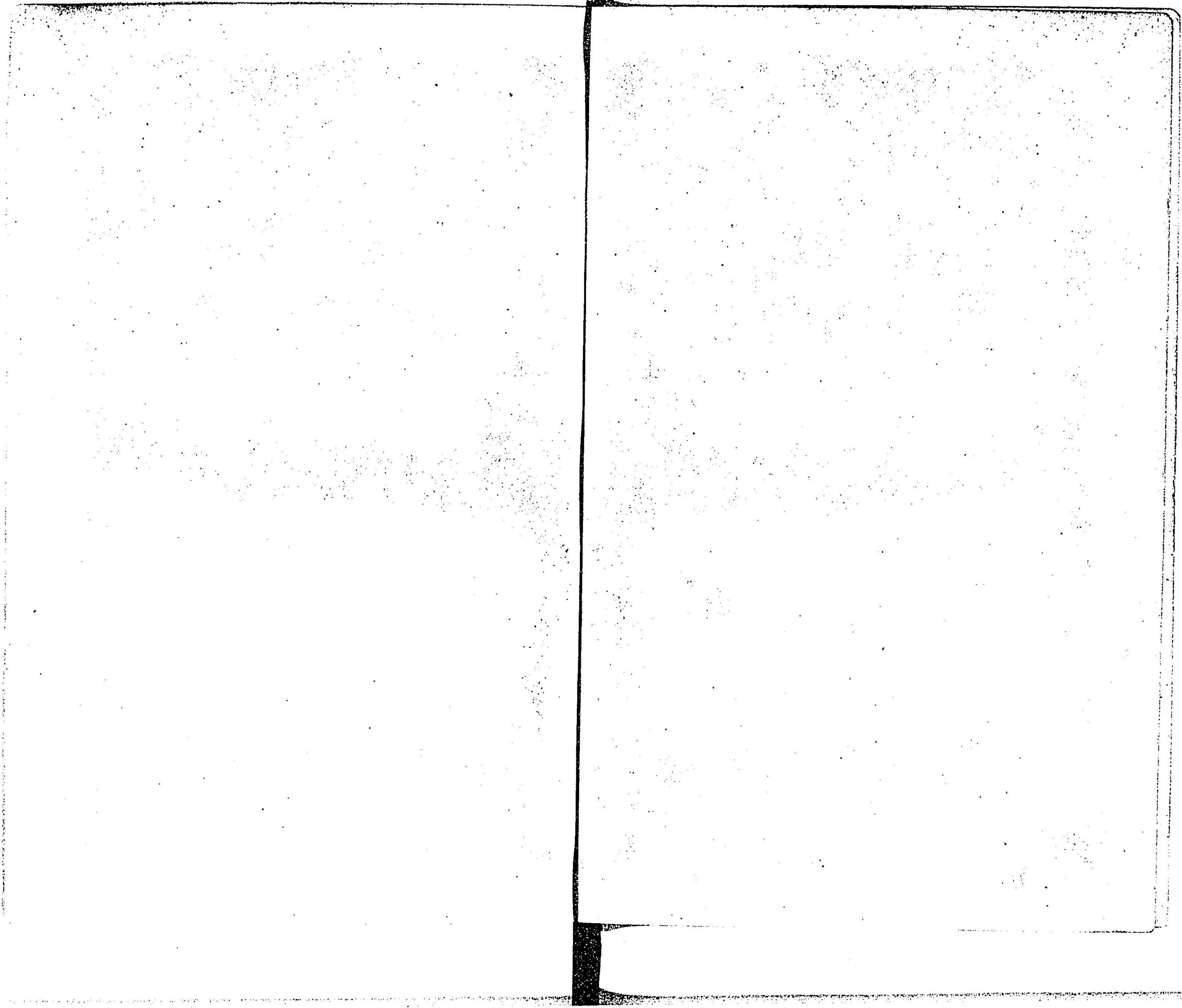
東京市芝區三田四國町三番地第六號

印刷所

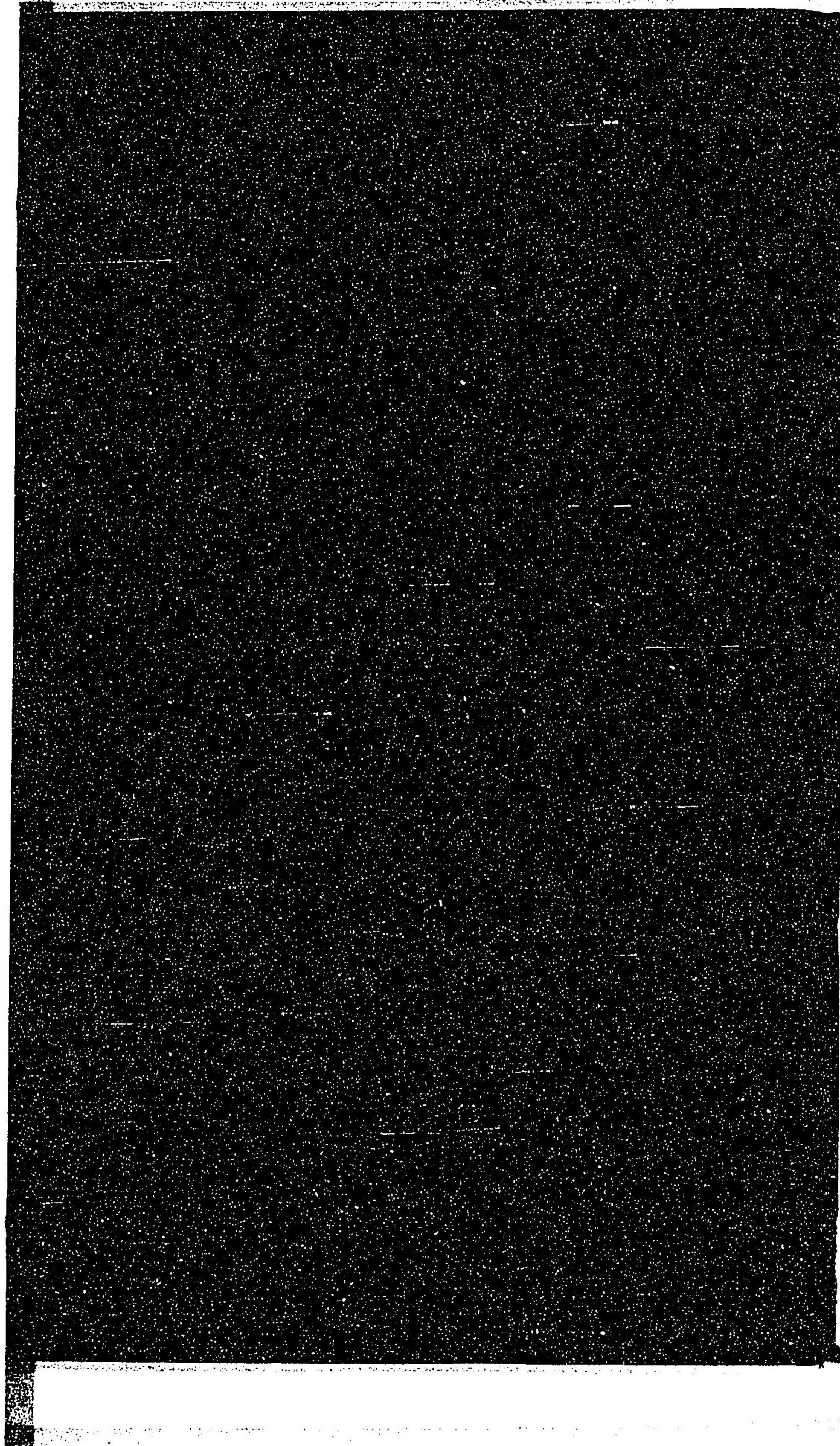
秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地





72
58





020788-000-6

72-58

信仰之階梯

ゼームス・フリーマン・クラーク / 著

M27

ABI-0614



